

山形・道伝遺跡

どうでん



(赤湯)

- 1 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字道伝(周辺)
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)六月~一月
- 3 発掘機関 川西町教育委員会
- 4 調査担当者 藤田宥宣・渡辺源一
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良末~平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

道伝遺跡は、一九七九年(昭54)に緊急発掘が行なわれ、多量の遺物が検出された。その中に、五点の木簡が出土し、墨書き土器や

遺構等から、地方官衙として位置づけられ、一九

八〇(昭55)年度より、

三ヶ年の計画で重要遺跡

確認調査が進められてお

り、その二年次に当る。

検出された木簡出土地点は、三間×七間、二面廂の掘立建物跡(昭54検出)

の西約50mの地区である。出土した場所は、人の胃袋状の形を示し、池状遺構とも考えている。幅2・2m~1・1m、深さ0・五六~1・二六mで、溝の北側を東西に幅約60cmの一列の杭列が横断する。溝の覆土は八層に分けられ、木簡は第四層出土である。この木簡出土溝より墨書き土器10点、絵馬1点、斎串1点等が出土している。

墨書き土器には「南」「依」「龍麻口」「大」「隻」「林」「目」「石」「万カ」「別」「弔」が判読できる。絵馬は両絵馬とも、墨書きの方形絵馬で、左向きの飾り馬が左より書かれ、前の両脚を曲げ、首を水平に下げ手綱がはられ、尾を後ろになびかせ走っている。また、紐穴がみられない。絵馬、斎串、完形の須恵器杯、蓋が検出され、蓋には「弔」の墨書きがある。これら遺物と同層位から出土する須恵器、土師器は八世紀後半頃と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「▼□



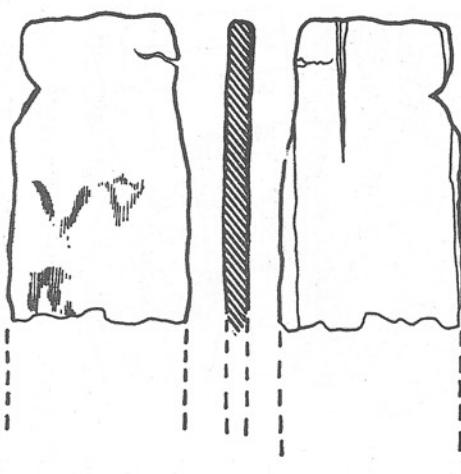
(30)×(29)×4 039 (第六号木簡)

200×20×3 033

(2) (木簡様木製品)

(1)は第四層出土、板目材で、墨痕はほとんど失なわれている。左上端に切り込みがあり右端、下端は折損し腐蝕もはなはだしく原形はとどめない。

山形・笛原遺跡



木簡(1)

所在地	山形県米沢市窪田町大字笛原字台
調査期間	一九八一年（昭56）七月～九月
発掘機関	まんぎり会
調査担当者	手塚孝・龜田吳明
遺跡の種類	集落跡
遺跡の年代	奈良時代～平安時代
遺跡及び木簡出土遺構の概要	



(米沢)

笛原遺跡は米沢市街地の北東3kmに当たり、最上川の本流となる松川によって形成された自然堤防及び河岸段丘上標高二二七mに位置する。一九八〇年（昭55）に笛原地区一帯が米沢市浄水管理センターと住宅団地造成の開発が計画されることとなり、米沢市教育委員会

(2)は第四層出土、上端左右に切り込みをいれ、下端を尖らせたものであるが、墨痕は認められない。
なお、墨書については、平川南氏の御教示による。

9 関係文献

川西町教育委員会

『道伝遺跡—第2次重要遺跡確認調査概報』

一九八一年
(藤田宥宣)